慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ねづ・まさし著 批判日本現代史
Sub Title	
Author	寺尾, 誠
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1958
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.51, No.8 (1958. 8) ,p.737(83)- 742(88)
JaLC DOI	10.14991/001.19580801-0083
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19580801-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

は、資本家階級にとっては、資本主義の合理化政策をもって労働者階級の階級意識を抹殺するに恰好のものであり、かつその学問的扮装の下に、資本主義制度の永久性を理論化してかれらの安眠剤となり、官僚国家にとっては、階級闘争の上に超然として全国民の上に善政を施し得る一種の立場のあること――よしそれは錯覚であり欺瞞であるとしても――を、理論的に支持し、そして最後に、近代的労働者すなわちプロレタリアートの解放運動、社会主義を極力排撃することによって資本主義的社会、ことに資本主義的国家に対して安穏なる存続の理論と方策とを与えんとするものであると」（一九〇頁）。

このように、日本社会政策学会の立場は、一方において自由放任主義に反対し、他方において社会主義にはげしい攻撃をあびせたものであり、結局は近代的なプロレタリアートの運動にたいして敵対する以外の何物でもなかったとしても、日本資本主義の一定の発展段階においてそれがはたした進歩的な役割は正しく評価されなければならない。明治二九年、当時の帝国大学の新進教授たちを中心として結成され、プロイセン的伝統をうけつぎながらも明治四〇年一二月にその第一回大会を開催し、大正一三年に正式に解散するまでの一八年間にわたる社会政策学会の歴史は、国中のすぐれた経済学者をすべて会員として日本の社会科学とりわけ経済学の発展のために、この学会が身をもって書き記した奮闘の歴史でもあった。この一八年間に日本の資本主義は大きく発展し変貌した。大逆事件、第一次世界大戦、ロシヤ革命、米騒動、関東大震災などの内外の大事件が日本をおそい、大きな衝撃をあたえると同時に、社会政策よりは、社会主義が、多くの人々をとらえ、社会政策の影は次第にうすれがちとなり、これがやがて社会政策学会の没落の大きな原因ともなったのであったが、しかしそのなかからまた多くのすぐれた社会政策学者が生れた。これらのすぐれた社会政策の理論家ないし実践家として、著者は、金井延、桑田熊蔵、豊原又男、福田徳三、高野岩三郎をあげて、その理論的立場と実践的役割とを浮き彫りにしておられる。とくに豊原又男のように日本のロバート・オーエンと称せられた佐久間貞一の思想的後継者でありながら、一般にあまり知られていない人物や、また桑田熊蔵の農業理論家としての側面などについて、具体的に論述されているのは興味深いものがあろう。そのほか、著者が親しく謦咳に接せられた金井、福田、高野の諸博士の思想や理論について、実に詳細にして周到な叙述がなされていることは言うまでもない。

とりわけ本書の最後の部分には、高野岩三郎博士と並んで河上肇博士について、かなりくわしくのべられている。のちにマルクス主義の理論的研究から実践活動に入り、ついに日本共産党に入党した河上博士も、その若き日は、熱烈な国家主義者であったという事実などは、それが自叙伝にはのべられていないところから、「知られざる反面」として、読者を微笑させるものがあろう。

以上、稚筆をもかえりみず、このユニークな労作の内容について、主として「社会政策学会」を中心として紹介を試みてきた。この書をひもとくことによって読者は、一貫してマルクス主義の立場に立たれる住谷教授の良心的にして学究的な息吹をみじかに感ずることができるであろうし、また伝記的な叙述の手法がゆたかにもちいられているため、これは、きわめて面白く読むことができる数少ない著作のひとつである。しかし本書のもっとも大きな特色は、何よりも日本における西洋経済学の輸入と発展が、自由主義経済学――社会改良主義としての社会政策学会――マルクス主義経済学と、その発展の歴史が著者によっていわば弁証法的に把握されている点であろう。筆者はここに本書のユニークな理由を見出すのである。だとすれば、率直に言って、日本におけるマルクス主義経済学の発展について、河上博士だけしかのべられていないのは、物足りない憾みがないだろうか。河上肇博士以外のマルクス主義経済学者についての評価はどのようにあるべきだろうか。本書を読み終って感じた疑問は、要するにこれであった。本書は日本における経済学の発展を著者独自の立場からまとめられたきわめて異色ある経済学史であることは論をまたない。筆者は経済学を学ぶ人々が、ひとりでも多く本書を読まれることをおすすめする。しかし問題はその後にある。すなわち、本書を手がかりとしこれを基礎として、われわれの世代が日本の経済学説史もしくは思想史にかんするよりすぐれたより体系的な労作をきづき上げることではないだろうか。（ミネルヴァ書房、昭和三三年一月発行、六五〇円）――一九五八・六・四――（飯田　鼎）

書評及び紹介

ねづ・まさし著

『批判日本現代史』

近年遠山茂樹「昭和史」、井上清「日本近代史」と続いてマルクス主義の立場から現代に関する歴史研究が発表された。またこれに対する批判として亀井勝一郎「現代史の課題」が提出された。亀井氏はそこで前記二者に代表される現代史家の画く歴史が「人間不在」の歴史であることを指摘し、一定の史観により史実をわりきることに強い疑問を表明した。こうしてこれらの人々をめぐり歴史に対する見方や態度、現代史の受けとり方等に関し一連の論争が行われるにいたった。ここに取り上げた「批判日本現代史」はこの論争から積極的に学びとり、正しい現代史の在り方を追求しようという意図で書かれたものである。著者がいう通り本書は体系的な、或いは一般的な歴史書ではなく、問題点の提出をねらいとしている。しかもそれは単に批判のための批判という形でなく、それらの問題点につき著者が独自に史実を読みとり、積極的な形でなされていることが本書の価値を高くしている。その批判は一方で林茂氏、竹山道雄氏等の保守的歴史家に向けられると共に、大部分は著者と同じマルクス主義陣営の歴史家達に向けられている。その批判は「歴史学は主観の学問ではない、文学でも創作でもない、事実にもとづいた科学

である」（まえがき五頁）という立場に基いて行われている。まず現代史のむずかしさが指摘され、その理由に史料の制約と戦前の天皇制による政治的圧迫をあげる。そしてあいまいに使用されている近代・現代という言葉に次のような歴史的規定を与える。近代は一八五四年の米船来日に始まり、一九一七年のソ聯の革命以前で終り、一九一七年より現代が始まる。近代の始めを一八五四年にしたのは「自然成長的に近代資本主義国に発展する力はほとんどなかった」日本が門戸開放によりはじめて資本主義世界へ登場したからである。現代の起点については、ソヴィエトの十月革命が世界史的意義をもち、国の内外での政策に質的な変化がもたらされたからであるとする。次にこの現代の始まる大正期に自由民権運動以来初めて高まった民主主義運動期をとり上げる。そしてこの大正デモクラシーの理論的代弁者である吉野作造に対する信夫清三郎氏の評価を批判し、彼の積極的意義にむしろ眼を向けることを主張する。吉野は当時漸く興隆しつつあった中産階級の中の進歩的層の代弁者である。彼は天皇制政府の圧迫、政党政治の未成熟、労働階級の未成長（サンジカリズムにとらわれている）という悪条件の中で立憲君主政治の徹底化を説き枢密院廃止、貴族院改革案等を提案し軍閥、官僚体制に迫った。彼は極めて適確に現実をとらえ帝国憲法を盾に可能な手段による漸進的改革を提案した。国民知能の養成、言論の自由の賦与、国民参政権の確立を通じて天皇と多数民衆の健全な結合の上に民本主義の花を咲かせようと願った。この提案は当時現実を一歩前進せしめる意義を持っていたが、明確な体制変革を打ち出さず労働者農民を中心とする大衆との結びつきをもたなかった吉野とその支持者には自ら民本主義を完成する力はなかった。しかしそれは人民勢力の未成熟、分裂と共に官僚政府に育成され天皇制と縁の切れないブルジョア政党の限界に大きな原因があるのであって、一人吉野だけの限界としてみてはならない。次に平民宰相といわれる原敬に対する服部之総、井上両氏の評価をとり上げる。彼等は原の反動性の側面のみに眼を奪われ絶対主義政治家として山県等と同一視する。しかし信夫氏もいうように原には山県達にはないブルジョア政治家の性格がむしろ特徴的ではないのか。なるほど原内閣は軍部や山県との妥協の産物であった。だからシベリア出兵をめぐって動揺したり、地主勢力をバックとした政友会出身の為普選に反対し、小選挙区制を施行し、労働者に対しても弾圧的な態度をとった。しかし彼は山県に典型的に示される軍閥政治に対しては終始反対し、軍事に対する政治の優越を説き、制限された君主制の合法的樹立こそが彼の理想であった。従って彼の保守性を含め、彼にはむしろブルジョア政治家という評価の方が適当であり、ここに大正デモクラシーと相通ずる立憲君主制の方向がみられる。次に井上、遠山氏が過少に評価する幣原外交につき、むしろ幣原の平和主義の面を評価することを主張する。彼は加藤内閣の外相であった時分否それ以前から中国問題につき内政不干渉の態度をとり田中義一の侵略外交に対しても激しく批判した。その為彼は関東軍とも対立したし、またソ聯との国交も回

復した。この平和主義は大正デモクラシーの影響や彼の世界情勢の認識の深さによる。勿論彼はあくまで保守的政治家であり、彼の背景はブルジョア政党である。そしてそのため人民勢力の平和勢力としての未成熟と共に彼の平和主義は極めて個人的なものに終った。しかし著者は自らの戦争協力を反省し、この保守政治家の一貫した平和主義に敬意を払っている。次に天皇制の圧迫と人民勢力の未成熟によって極めて実り少なかった昭和の民主的な運動から昭和七年夏に行われた米よこせ運動の実態を紹介する。当時は満州事変のあとで戦争への道がかなりはっきりしてきたが、失業者は三五〇万人に達し、端境期の七、八月には米価は上るし、下層民衆の不満は高まっていた。このような情勢の中で関東消費連盟が政府の米穀海外ダンピングの事実をとらえ、合法的な枠ぎりぎりで大衆を組織し大衆的な請願運動を展開した。そして東京では一定の譲歩をかちとるところまで運動を展開したが、共産党を始め民主勢力の主体的な弱さと天皇制の圧迫によりそれ以上の発展をみずに終った。次に二・二六事件についての井上、遠山氏の評価をとり上げ、もっと生き生きとこの事件を分析できることを示す。ことに当初の運動の進展に比し、後半の鎮圧への変化（ことに陸軍自身の）について指摘する。遠山氏は海軍、政界財界、国民の態度によるといい、井上氏は天皇制秩序の崩壊をもたらすから鎮圧するという説が有力となったという。しかし両者が避けているのは、このような態度変更の裏には天皇自身の断固たる処分への態度があったという事実である。また反乱の動機については陸軍内部の皇道派と統制派の派閥だとされているが、これも青年将校に建設の計画のないこと、統制派の方がむしろ独占資本との結びつきの強かったこと、軍の上層部に彼等を利用しようとした一派の存在したことから考えて、単純に皇道派の独裁がこの叛乱の目的であったといいきれないのではないか。むしろ財閥と組んだ統制派がこの事件を挑発し、利用したのではないか。またこの事件の思想的指導者とみられ死刑となった北の計画は青年将校と直接関連がなかったが、天皇社会主義とでもよばれる国家社会主義の考えで、神がかり憲法の日本にあってはそれは生かしておけない危険思想であり、単に独占資本を守るためという限られた思想ではない。次に天皇の戦争責任について異常に甘い評価を下す竹山道雄氏に反対し、具体的に戦争が進行して行く過程で天皇がいかに戦争に対し無批判に協力して行ったかを指摘する。昭和十六年十一月三十日に開戦の決意をしてから終戦間際までの天皇は東条を始めとする戦争協力者と共に歩む天皇であり、戦争をあくまで防ぐ決意はみられなかった。これと関連して日本人一般の戦争責任の問題をとり上げる。井上、遠山氏等の進歩的歴史家は国民は犠牲者であり、支配階級こそが反動的であり、戦争の責任者なのだという風にこの問題を処理する。しかし明治以来の日本が植民地を維持して発展してきたことと関連し、日本国民の植民地人民への蔑視、戦争中の残虐行為、戦争への協力意識等につき率直にこれを認め、反省することこそ、この問題の真の解決である。たとえば日本軍の残虐行為にし

ても全ての兵士がそれを行ったのではないにしろ、いわゆる軍部だけの行動でもなく、そこには国民大衆も参加しているのである。そしてこのような行為を戦場心理として片づけてしまうことも問題であって、日本国民の中に根づよく残っている封建的な意識にまで眼を向けるべきことを主張する。そしてこのような国民の側の意識的未成熟こそ支配階級の戦争政策を容易なものにしたのである。次にこれと関連して戦時中の抵抗について進歩的歴史家の過大評価を批判する。ことにイタリヤ人民の戦争末期の反ファッショの統一レジスタンスに比べてみると、個々にみられる抵抗の例はともかく、全体としては極めて未成熟なものであったことを指摘する。工場における欠勤率やオシャカの増大や争議行為の存在も戦争末期の生活の窮迫や技術水準の低いことによるものであって、決して国民の反戦意識の高揚によるものではない。そうみない限り戦争直後の国民の無気力を科学的に説明することは出来ない。進歩的歴史家の一面性は戦時下の弾圧をのべる場合にもあらわれる。彼等は共産党あるいはその同調者のみを弾圧の犠牲者として取り上げるが、これでは弾圧の広さ、深さは理解しえない。弾圧は国民の生活の凡ての分野に及んだのであり、川柳作者、切手蒐集家、高級ラジオ所持者にも特高の眼は向けられた。またキリスト教に対する弾圧は明白に憲法に保証された信教の自由の侵害であった。これについて著者は夫々具体的な例をあげている。そしてひとり共産党だけが平和をまもったというような思い上った英雄主義をいましめている。これと関連してソ連の参戦とソ連軍の暴行についても事実を忠実にとらえることを主張する。まずソ連の開戦が中立条約違反だという保守的歴史家に対し事実で日本側の侵犯の例をあげ、この非難の当っていないことをつく。次にソ連軍の満州での暴行につき、その事実を率直に認めることを提案する。そしてこれを小数民族部隊のせいにすることも事実でなく、れっきとした白人部隊も暴行を行ったのであり、彼等の無規律、暴行ぶりは、後に入ってきた中共の人民軍と比較した時に明白である。尤も一年でこれらの部隊は本国へ召還され治安は回復したが。そしてこの原因はスターリンによる大国主義＝勝ちさえすればよいという意識にその根をもち、それに白人優越感が、国外での異常な場面で露わとなったのであるとする。次の二節で今まで個々の具体的な問題についてのべた進歩的な歴史家への批判を整理して提出する。まず井上、遠山氏の日本共産党への甘い評価に反対し、このような評価は結局両氏を含めた従来のマルクス主義歴史家の観念論、主観主義に基づくものだとする。日本に何故大規模な反ファッショの統一戦線が成立しなかったかという問題についても、事実を否認したり、社会民主主義に対する批判だけに終始したりしてはならず、日本の共産党に絶えず存在した極左セクト主義を指摘しなくてはならないとする。これは無政府主義やサンジカリズムの傾向が克服されなかったことに原因があり、しかもこれは日本における封建的意識の強固な残存という事実から理解すべきである。このため大森ギャング事件や二七年、三二年テーゼや戦後のメーデー事件等

の評価が歴史家の政治的立場により歪められていることを指摘する。そして次のように正しい進歩的歴史家の在り方を示す。第一にあくまで事実から出発し、それに合わない原則はむしろ修正する勇気を持たなくてはならない。例えば狩猟、牧畜、農業という時代序列はマルクス、エンゲルスの時代の定説であったが、今は牧畜と農業は余りずれない時代として存在することが立証されつつある。学問は絶えず発展するもので、一定の点に留まってはならない。第二にマルクス、エンゲルスを始め、ヨーロッパの文化遺産やブルジョア科学の成果から学ぶことが必要である。そして時代や制度について肯定的理解と共に否定的理解をもち、あくまで事実に合うかどうかという批判の精神を保持しなくてはならぬ。従ってインテリである歴史家は「自分の胎内の封建的精神構造を直さない限り真実を尊重する客観的歴史は永久に書けない」のである。このような日本のインテリの精神構造は古い儒教精神や大義名分論に支えられ、エリット意識＝官僚意識をうみ、無政府主義やサンジカリズムの伝統を進歩的と自認するインテリや政党の中にまではびこらせているのである。そしてここから支配階級が反動で、国民が進歩だという公式的歴史観がうみだされる。しかし支配階級の思想は庶民の生存や生活と結びつき、その中にある弱さを利用して成立するのであって、正しい歴史家であれば、このような国民の側にある弱さにも批判の眼を向けねばならない。例えば戦後の日本の労働者でさえも封建思想、小市民観念、目前の生活上の利益を捨てきっていないのである。その点でマルクス・エンゲルスが、歴史に進歩的な面と共に反動的な面、必然性だけでなく偶然性の価値を認めていたことから学ばなくてはならない。このような常識を守りぬくことを著者は提唱している。そして最後に日露戦争直後の日比谷焼打事件についてこれを一九〇五年のロシア革命と対比してとらえようとする信夫氏に対し、暴動であれば進歩とみる人民史観、窮乏史観の誤りの典型として指摘する。この暴動はモッブであって、軍国主義、排外主義の思想にとらわれた職人層を中心とし、右翼的な壮士等を指導者としていた。従って明確な民主主義革命の目標をかかげたロシアの第一次革命とはその性質を全く異にしていたといわざるを得ない。

以上大まかに紹介してきた本書は我々の生活と密接な結びつきをもつ現代史について正しい判断を下そうという意図をもって書かれている。従って井上、遠山、亀井氏等の論争の後にこの本が書かれたことは大きな意義がある。ことに亀井氏の様々な疑問について本書は一応答えているといえよう。すなわち「戦争を強行した軍部や政治家や実業家と、それに反対して弾圧された共産主義者や自由主義者と、この双方だけがあって、その中間にあって動揺した国民層のすがたは見あたらない」とか国民の東洋人蔑視の感情が支配階級に利用された点や、個々の人物の描写力、共産主義者の評価、ソ連軍の暴行事件等々に対して具体的な史実の読みとり方を示して答えている。そしてその試みが一応成功しているのは、著者自らがのべている事実を重んじ、事実と原則の関連をたえず正しく保つ為の自己

検討を軽んじないこの歴史家の批判的方法、批判的精神があるからであろう。従って「何故この事実がそうあらねばならなかったか」という歴史学の根本命題について、深く事実の只中に入りこみ、その事実の内部の関連を把握する科学的な態度の重大さを感ずる次第である。しかし著者自身がまえがきでいっているように、本書は「疑問の集積」であり、決して完成された模範回答ではない。そこで最後に現代史の専門家ではない私がこれらの問題提起から更に感じた問題点を指摘してみたい。成程著者は事実を尊重し、それを基にして正しい歴史を叙述しようとし、一応の成功をみていると思える。しかし「何故この事実がそうあらねばならなかったか」という歴史法則を認識する角度からみるとなお不十分な点、未解決な点が存在するのではないか。勿論これは本書の構成による点もあろう。すなわち個々の問題が共通の問題意識に貫ぬかれているとはいえ独立して提出されているからである。しかし例えば大正デモクラシーにしてもこの時期に何故このような民主主義的な運動が日本でひきおこされたのか、その客観的な条件は一体何であるかといった面への追求がもっと必要であるように思える。これは勿論日本における資本主義の発展とそれに伴う政治的社会的変化をその内部的な関連とその運動として把握するところから出発することになろうが。そしてこのような客観的な側面の分析が十分、正しく行われる時著者の極めてすぐれた各個人、各階級の主体的側面の分析が確証され、

「何故そうであったか」という読者の疑問に答えることが出来るのではないか。原敬の評価にしても、確かに旧来の藩閥政治家である山県達と異なる側面を見出しうるが、著者自身のいう山県達との妥協的側面が何故あったのかということを明らかにしなくてはならない。またこのような両面をもつ原を「ブルジョア政治家」と規定するならば、日本における当時のブルジョアジーの位置づけ、その利害関係を事実に基き立ちいってつかみとることによりこの規定に対する反論に答えなくてはならない。原の保守性がこのような反論の根拠となっている故に、この保守性が「ブルジョア政治家」としての彼にとって必然であったかなかったかがこの問題の争点となるのである。このような点を指摘してみると、現代史を含め歴史学の今後の課題は、著者のいうように、「事実を尊重する」という態度を堅持すると共に、その為にこそ、事実に埋没せず事実を正しくつかむという科学的な態度を具体的な実証の内に結実させるところにあるといえよう。これは「事実をいかにつかむか」という問題に集約されるが、それと共に、経済的な諸関係、政治的な諸関係、その他の社会的諸関係、それらの相互の関連と内部のつながり、歴史における法則の理解、必然と偶然の問題等の様々な問題をいかに正しく発展させうるかにかかっている。（日本評論新社　三九〇円）

（寺尾　誠）

経済学関係文献目録

（昭和三十三年五月刊）

経済理論・思想・学説史

*新版経済学原理　土方成美著　A5　三七八頁　四六〇円　（中央経済社）

*価値形態論　中野正著　A5　四七四頁　七五〇円　（日本評論新社）

*現代マルクス主義　2　マルクス経済学の展開　古在由重・井汲卓一・村田陽一・長洲一二編　A5　二四八頁　三〇〇円　（大月書店）

*経済学発達史――古代より現代まで――　阿部源一著　B6　三七五頁　三八〇円　（白桃書房）

*社会主義経済学〈経済学入門全書〉　副島種典著　B6　二二六頁　二八〇円　（東洋経済新報社）

*やさしい経済学　7　都留重人・高橋長太郎編　B6　三二六頁　二八〇円　（勁草書房）

*自由と計画の経済学　ジョージ・N・ハルム著　金子精次・丹羽春喜・張光夫・高田鉄雄訳　A5　四三八頁　六〇〇円　（新元社）

*需要理論〈岩波現代叢書〉　J・R・ヒックス著　早坂忠・村上泰亮訳　B6　二五四頁　二七〇円　（岩波書店）

*マルクス経済学の展開　ロンルド・L・ミーク著　山田秀雄・水田洋訳　B6　一七一頁　二八〇円　（紀伊国屋書店）

*重農主義分析　横山正彦著　A5　三一六頁、五八〇円　（岩波書店）

*資本論研究　向坂逸郎・宇野弘蔵編　B6　四八一頁　五〇〇円　（至誠堂）

*マルクス経済学の創造的発展　堀江忠男著　A5　三九九頁　七八〇円（至誠堂）

*経済政策の対象と方法――日本経済政策学会年報Ⅵ――　一九五八　日本経済政策学会編　A5　一五六頁　三〇〇円　（勁草書房）

統計・経済数学

*経営数学　4　（時系列・リニヤ＝プログラミング・ゲームの理論・品質管理・理論経済学）　竹内清・渡辺浩・関恒義・片山三郎・中村清一著　A5　三八八頁　四五〇円　（みすず書房）

*日本経済統計集――明治・大正・昭和――　日本統計研究所編　B5　四〇七頁　二八〇〇円　（日本評論新社）

*現代経済理論のための数学入門　ベクトル・行列・ゲームの理論　岡本哲治・福田献一著　A5　二四四頁　五五〇円　（日本評論新社）

歴　史

*古墳とその時代（古代史研究第4集）　古代史懇話会編　A5　二三五頁　四五〇円　（朝倉書店）

*源頼朝〈岩波新書〉　永原慶二著　B40　二一一頁　一〇〇円　（岩波書店）

*源頼朝〈アテネ新書〉　安田元久著　B6　二二一頁　二五〇円　（弘文堂）

*大隈重信（三代宰相列伝）　渡辺幾治郎著　B40　二五〇頁　二〇〇円　（時事通信社）

*世界史大系　2　文明の発生　誠文堂新光社編　B5　三九七頁　一四〇〇円　（誠文堂新光社）

*日本考古学年報　7　昭和二十九年度　日本考古学会編　B5　二一四頁　五五〇円　（誠文堂新光社）

*日本史の人物　松本新八郎著　B6　四〇八頁　四八〇円（未来社）